

『星降る夜に』 - 倉撃独人

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

カタカタと音を立てて、夕焼けに染まった川沿いの道を自転車は走る。街は死んだように静まり返り、私は少し不安になった。

今日は、地球最後の日。

海に面した高台にある小さな家。それが私の住む家だ。

玄関の扉の前で振り返ると、いつもの海と、空に上がるシャトルが見えた。シャトルには火星に避難する人たちが乗っているのだろう。

「ただいま」

二階にある自分の部屋に直行してベッドの上にカバンを放り投げた。部屋の中を見て忘れ物はないかを確認し、制服のまま一階に降りた。

「ただいま、お姉ちゃん」

「あ、おかえり」

姉も帰ってきたばかりのようだ。ワイシャツに膝丈のスカート。スーツの上着だけを脱いだ状態だ。

「仕事が早く終わったから、さっき大きい荷物を送ってきたところ。これから晩ご飯の準備するからちょっと待ってて」

長い髪を手早くまとめながら姉は言った。

「今日は何？」

「野菜チャーハン」

「ああ、はいはい。手伝うよ」

冷蔵庫の中を確認する。チャーハンの材料は全部揃っている。しかし、チャーハンの材料以外は何も入っていない。

「いいから座ってな。今日ぐらい手伝わなくてもバチは当たらないよ」

「ま、それもそうか」

今日ぐらい、地球で食べる最後の食事ぐらい、お客様気分でのんびりもいいかもしれない。

「じゃあ、お姉ちゃんにお任せします」

「うん」

食卓の椅子に座って、台所に立つ姉をぼんやりと見つめる。

野菜を刻む音が静かな部屋の中に響く。ニンジン。タマネギ。それからピーマン。

「ピーマン全部使うの？」

まな板の上にはピーマンが三つ。二人分にしては多過ぎる。

「もったいないから」

「余ったら避難する時に持っていけばいいのに。小さいから邪魔にもならないし、向こうでお肉が買えたらピーマンの肉詰めとかにもできるのに」

「いいの」

慣れた手つきでピーマンを刻む。

私たちが小学生の時に母は病気で死んだ。三年前に父も事故で死んだ。

もう三年も二人きりで生きてきた。姉の料理の腕が上がったのは当然なのだ。

「野菜チャーハン、って言うよりピーマンチャーハンね」

刻んだピーマンの山は、ニンジンやタマネギの山の倍ぐらいの大きさになっている。

「いいでしょ。私ピーマン好きだし」

姉は刻んだ野菜をフライパンの中に入れて炒める。

「あんな苦いもの、好きにはなれないなあ。嫌いではないけど」

ピーマンが柔らかくなるまでじっくりと炒める。それが姉流のチャーハンだ。

「あんたは味覚が子供だもんね」

炊飯器から取り出された米がフライパンの中で野菜と一緒に踊る。
「グリンピースも食べられない人に言われたくない」
フライパンから、ジュ、ジュ、と音が聞こえる。
「うん」
塩を適量な量振りかける。
「お姉ちゃんが言い返してこないなんて珍しい。なんか変だよ」
胡椒もかけて炒め続ける。
「そう？」
ジュツ、ジュツ。
「ねえ、お姉ちゃん」
ジュツ、ジュツ。
「ここで死ぬつもり？」
姉の手が止まった。
会話は途切れ、ジュー、とチャーハンが焦げる音だけが聞こえる。「うん」
火を止めて、チャーハンを二つの皿に分ける。
「どうして？」
姉は黙ったまま私の前にチャーハンを置いた。とりあえず食べろ、という事だろう。
いつもより苦いチャーハンを食べながら私はぼんやりと考えた。

地球は滅びる。
隕石群がすぐ近くに来ていて、そのうちのいくつかは地表に降り注ぐ。地表に辿り着く前に小さいものは燃え尽きるだろう。だが大きなものは燃え尽きないで地上に落ちる。今まで人類は隕石による被害を大して受けて来なかった。だから今回もきっと大した事はないだろうと思われていた。
しかし、今回の隕石群は巨大な隕石を含んでいるという事がわかった。巨大隕石を砕く技術を人間は持っていた。しかし、その技術が使われる事はなかった。
隕石の破壊に成功する可能性は高くない。それに環境破壊が進んで、すでに地球上に人間が住む事ができる土地はほとんどない。
火星を人間が住める環境に変えるという計画はすでに完成している。地球にこだわる必要はない。そういう事だった。
もちろん、それに反対した人もたくさんいた。
地球にしかないものは数え切れないくらいある。そう主張して、地球と運命を共にすると宣言した人もたくさんいた。
本心からそう言っていた人もいたし、地球を出ないと言う人を見捨てる事はないだろう、と思って言っていた人もいた。
しかし、地球は見捨てられた。残ると言った人々も見捨てられた。いつ滅びるかわからない地球を守るよりも、これから人類が暮らしていく火星をよりよい場所にするために全力を尽くす。それが答えだった。
その答えを聞いて、地球と共に死ぬ、と宣言したほとんどの人が火星へ渡った。
残ったのはごくわずか。

「ごちそうさま」
そう呟いて私はスプーンを置いた。
わずかとはいえ地球に残る人がいる。だから私は今日も学校に行った。以前よりも広く感じる教室で、地球に残ると言っていた先生にお別れの挨拶をしてきた。
先生には明日が来ないんだ、と思うとなんだか悲しくなった。
「私、壁に落書きしたらお母さんにすごく怒られた」
突然、姉が言い出して私は戸惑った。
「え？」
「二階の和室の壁、薄く落書き残ってるでしょ？」
「うん」

「それからピアノ。お母さんの弾くピアノ、大好きだった」
母はピアノが特別に上手だった訳ではない。
だけど、姉も私も母のピアノが好きだった。
「お父さんの思い出は、まずお皿五枚割り」
母が死んだ後は父も家事を手伝うようになった。
慣れない皿洗いをし、乾燥機に入れ、乾いた皿をしまおうとした時だった。床下収納の扉の把手が上がっていたのに気付かずつまずいた。
「お皿が全部見事に真っ二つだったからなんだか笑えてきちゃって」
三人で大笑いした。母が死んでから初めてみんなで笑った。
「あと、シートン動物記」
父は本が好きで、私たちが眠りに就く前には必ず何かを読んでくれた。
「クマの話が好きだったな」
私はオオカミの話が好きだった。今日はどっちの話を読んでもらうかで、いつも喧嘩をしていた。
「……懐かしいね」
思わず私はそう言った。
「うん」
姉は頷いた。
開け放した窓から風が吹き込む。
揺れたカーテンが視界に入り、ふと窓に目をやると一番星が光っているのが見えた。地球を出るためのシャトルの最終便まで後二時間ほどだろうか。
「私ね」
姉は言った。
「お父さんとお母さんの思い出はほとんどこの家に詰まってると思うの」
父と母の姿を思い浮かべる。
リビングのソファで本を読む父。新聞を読みながら朝食をとる父。ピアノの椅子に座って楽譜を見つめる母。台所で夕飯を作る母。
家族で出かけた事もあった。だが、私が思い浮かべた父と母はいつもこの家にいた。
「そうだね」
どうして姉は地球に残る事を選んだのか。その答えが私にはわかった。
姉はこの家で死にたいのだ。父と母の思い出が詰まったこの家で。
「ごめんね。一人にしちゃうね。だけど私はお父さんとお母さんと一緒にいたい」
「それは私もだよ。私も残る」
「ダメ。ちゃんと生きなきゃダメ」
「お姉ちゃんがそれを言うの？ そんなのずるいよ！」
「私がしようとしてる事は自殺と同じだよ！ わかってるの？」
自殺と同じ。そう言われて私は言葉を失った。
「っ、だけど！」
「早く行きなさい」
「嫌だ！」
「いい加減にしなさい！ 早く出て行って！」
姉は荷物を私に向かって投げつけた。
こんなに怒鳴られたのは初めてだ。こんな風に突き放されたのもきつと初めてだ。
悲しくなって涙が溢れ出して、私は家を飛び出した。

妹との最後の思い出が喧嘩だったなんて、なんだか悲しい。
「だけど、生きて欲しかったの」
私が残ると言ったら、妹も残ると言い出すだろうとは予想していた。
私のわがままで妹を死なせる訳にはいかない。覚悟ができてしまうだけの時間を与

えてはいけないと思った。だから、最後の最後まで言わなかったのだ。

シャトルが出るまでもうあまり時間はない。残されている人はいないかどうか見回っている人もいる。

妹の制服の胸ポケットに身分証明書は入っている。向こうに行っても身分証明ができなくて困るような事はないはずだ。

だから大丈夫。いいんだ。よかったんだ、これで。

「元気でね……」

庭のベンチに座ってぼんやりとしていると、最後のシャトルが空へ上がっていくのが見えた。

「さよなら」

小さく呟いて目を閉じた。

しばらくして目を開けるともうシャトルは見えなかった。ただいつもの星空だけがあつた。

今日が地球最後の日なんて嘘みたいだ。

ここで眠って、気がついたら明日が来ているのではないだろうか。ありえない事だけど、そんな空想をしながら眠るのも悪くない。

そうだ。眠ってしまおう。このまま思い出に包まれて眠って死ねたら、それは最高の幸せだ。

私は再び目を閉じた。

「そんな所で寝てると風邪引くよ」

声が聞こえた。聞き慣れた声。慌てて目を開けて、声がした方を見る。

「なんで」

妹が微笑みながら立っていた。

「どうしてこんな所にいるの！」

「見回りの人がシャトル乗り場まで連れて行ってくれたんだけど、これでいいのかな、って思っちゃって。お姉ちゃんの答えはわかったけど私の答えは何だろうって」

「答え……」

私は思わず呟いた。

「私、帰ってきたよ。これが私の答えだよ。お姉ちゃん」

妹ははっきりとそう言った。

「お姉ちゃんと一緒にいたい。お父さんやお母さんがいなくなっても、悲しい時とか辛い時に私が頑張れたのはお姉ちゃんがいたからだよ。お姉ちゃんほど大切な人はこの世界にいないの。お姉ちゃんがお姉ちゃんの出した答えを貫くなら、私も私の出した答えを貫く」

そうか。私に答えがあつたようにこの子にも答えはあるんだ。 だけど、この答えは出さないで欲しかったな。

「バカ」

「うん」

「もう友達にも会えないんだよ」

「わかってる」

「寂しくないの？」

「寂しいよ。でもお姉ちゃんがいなくなるのが一番辛い」

「……バカ」

結局妹を死なせる結果になってしまう。それはすごく悲しい事。だけど、一緒にいたいと言ってくれた事が嬉しくて仕方なかった。

「ごめんね。ありがとう」

妹をしっかりと抱き寄せて私は言った。

星が流れ始めた。

「最後になるんだったら、もっとちゃんとしたもの食べさせてあげたかったな」
最後の晚餐は、ピーマンだらけのチャーハンか。それでも構わない。

「お姉ちゃんのチャーハン好きだよ、私」
簡単に作れる料理。母が死んでからは一番多く作った料理。私にとってのおふくろの味はこのチャーハンかもしれない。作っているのはおふくろではないが。

「今日のはちょっと苦かったけど」
「ごめん」
姉は苦笑いを浮かべた。
こんな笑顔を見るのも今日で最後。

「怖いの？」
突然、心配そうな顔で姉が聞いてきた。

「どうして？」
ここに残るって決めたんだ。怖くなんか、ない。

「震えてる」
私の手は震えていた。
死ぬのは怖い。心はそう思わないように必死なのに、体は怖いと正直に訴えている。

「……ちょっとだけね」
精一杯の強がり。姉は笑った。

「やっぱりバカだ」
「バカバカってうるさい」
「事実じゃない」
姉は私の手をしっかりと握った。
姉の手を握り返して空を見上げると、星が次々に流れていくのが見えた。

「綺麗だね、流れ星」
少しだけ震えている姉の手に気付かないふりをして、私は言った。
「なにか願い事でもするの？」
「無事に明日を迎えられますように、と言いたいところだけど、それはありえないからなあ」
何を祈ろうか。
「生まれ変わりなんてものが本当にあるなら、またお姉ちゃんの妹になりたいな」
「恥ずかしいやつ」
「あ、嬉しくないの？」
「嬉しいよ、すごく」
空が明るくなった。大きな隕石が沖の方に落ちていくのが見えた。
遠い。だけどあの大きさだ。ここも無事では済まないだろう。

「お姉ちゃん」
「ん？」
海が迫ってくる。
「また会おうね」
「うん」
海に飲み込まれる。生まれたところに戻るのだな、とぼんやりと思う。
生まれたところに帰って、また生まれてくる。
次も一緒にいたいと願って、私は姉の手を強く強く握った。

[戻る](#)